

## 第32回 スクリーンコンサート 2024. 3月

## 今月のテーマ ベートーヴェン交響曲第5番 運命

ベートーヴェンの弟子が「冒頭の4つの音「ジャジャジャジャー」とか「ダダダーン」は何を示すのですか？」と問うと、「運命はこのように扉をたたくのだ」とベートーヴェンが答えたとき、ここから「運命交響曲」の名がつけられたとされています。



冒頭の動機は演奏家の解釈が非常に分かれる部分であり、ゆっくりと強調しながら演奏する指揮者もいれば、Allegro con brio（速く活発に）という言葉に従ってこの楽章の基本となるテンポとほぼ同じ速さで演奏する指揮者もいる。曲全体がソナタ方式で「暗から明へ」という構成をとり、激しい葛藤を描いた第1楽章から瞑想的な第2楽章、第3楽章の不気味なスケルツォを経て、第4楽章で歓喜が解き放たれるようなドラマティックな楽曲構成は後世の作曲家に模範とされた。

第4楽章で交響曲史上初めてトロンボーン、コントラ・ファゴット、ピッコロを使用し、新しい響きを開拓している。

## 「運命」の聴きどころ

第一楽章しか知らない人が多いかもしれませんが、この交響曲は全楽章を通して聴くのがオススメです。なぜなら、全部を通して聴いて『運命』という作品が完結するからです。小説でも、第一章だけで読むのをやめてしまう人はいませんよね。

**第一楽章**「ジャジャジャジャー」という有名な動機に始まり、これは全曲を通して用いられ、何度も形を変えて登場します。

特に第1楽章は楽章全体がこの「ジャジャジャジャー」という動機に支配されており、ティンパニも終始この動機を打つ。

**第二楽章**は、ゆっくりとしたロディーです。懐かしい幸せな思い出、または日だまりのような暖かな感じが漂います。各楽器の音域のバランスの良さや、豊かな響きから生まれる安定感が特徴です。

**第三楽章**は、悲しさの中にも客観的に自分の運命を受け止めようとしている決心のような雰囲気から始まります。チェロ・ホルン・コントラバスの三楽器が、「運命がドアを叩く音」を組み込みながら一つのメロディを折り重ねていきます。

その中間部のフーガ(音の追いかけっこ)からは、新しいことに挑戦してみようとするような心境の変化が感じられます。

**第四楽章**は、第一楽章とは正反対で、明るくハイテンションです。悩みを全く感じられません。よく晴れた日に素晴らしい景色を見ながらドライブをしているような、爽快感や疾走感があります。

苦難に陥った人間(ベートーベン自身?)が、その状態から這い上がり、前進していく様子を描いているのだと感じます。

コンサート会場で聴くことをオススメします。エネルギーに満ち溢れる生のオーケストラの音に感動すること間違い無しです。

### ソナタ形式とは

提示部・・・活気のある第1主題と静かな第2主題が  
↓  
主題とは ⇒ 曲を構成する主なメロディー  
展開部・・・2つの主題をいろいろな調で変化し展開させる  
↓  
再現部・・・最初の提示部が再現される  
↓  
コーダ・・・曲のクライマックスを作り締めくくる